

グリーンサークル23号

クローズアップ・相田幸一
活動団体を訪ねて・永山駅前さえすりの森/からきだの道の会
多摩市みどりのかわら版・岡野則夫



ヒルガオ

みどりと水と子ども

相田 幸一

わたしは、森とみどりに関わって30年、水と関わって20年。

ずいぶんと時間が過ぎたものだと思う。近年はこれに生物多様性の視点が加わってきた。

この内の約半分が多摩市地域での関わりだ。

多摩市の自然環境に目を向けたとき、市境付近とかつての谷戸部分の斜面地に僅かではあるが残る在来樹林地と、多摩川にそそぐ二つの河川の存在は、大変大切で、黙って見過ごせないものと感じている。多摩ニュータウンは造成された公園、緑地、街路樹が30年から45年もたち、その緑の量は大変豊かになり、文字通りガーデンシティを形成している。ベネッセのビルの最上部付近から見下ろした時、まさにそれを実感した。街が緑の中に埋もれるように見える。

ここに発生する緑の保安全管理の問題は限りなくあるが、ここでは触れないでおく。

河川も改修が進み親水化に向かっていくところもあり、古い三面護岸部分も徐々に自然性を高めつつある。だが草や木や土の堆積に向けられる一般市民の懐疑的視線は拭い去ることができない。40年前にも遡る河川の汚濁からイメージが抜けきらないからだ。

しかし、これらの環境を活かした子どもたちの関わりが、近年特にその重要性を増して語られことが多いと思うのだ。

子どもたちの発育にとって、自然環境の中での自由な行動、遊びが大切な意味を持っている。体力をつけ、知恵と知識を養い、情緒を深め、協調性・社会性を育

む。これらをすべて含んでいるのが、まさに自然環境の中の活動であり遊びだからだ。私たちが体験的にそれを感じるだけでなく、子どもの発育を研究する研究者からも盛んに指摘されるどころだ。

ここ数十年の子どもたちの様子を見るにつけ、この自然との関わりがかなり欠落しているように思う。学校教育もそうだが、何より家庭での、そして住んでいる地域での子どもへの対応があまりにも脱自然性にはまり込んでしまっていないだろうか。子どもの自発性に任せた自由な遊びこそ特に欠かせないものと思う。

冒頭に触れたように、多摩市周辺の自然環境状況は作られたものが多いが、時間とともに豊かな自然性をもたらしてくれている。幸い、「グリーンボランティア」の活動は樹林環境の保全を目的にしながらも、「水辺の楽校」は水辺に関わる体験と生き物観察に重点を置きながらも、地域の学校や地域社会に自然を開放する動きとして活発になりつつある。

学校では、学校林や小規模の樹林地を活用した遊びと実践活動、学校水田では伝統的な食文化と生活文化を体験し、農園ではエディブル・ガーデンと呼んだりして野菜を育てながら食文化を学んでいる。どの場合でも近隣に住んでいる方々のサポート無しでは実行はできない。また学校外へ出て緑地や河川での自然体験の遊びや学習もたびたび行われるようになったが、これも地域の人たちのサポートで成り立っている。

今、私たちは、これらの流れをより進めたいと思う。そして、子どもたちの未来・すなわち私たちの住む、暮らす健全な未来社会を確保していかなければならない。そうするために、水と緑の活動を継続推進していく心構えをしっかりと持つ必要がある。そのことをもう一度確認しておきたいと思う。

多摩市グリーンボランティア連絡会副代表/森林フォーラムの会/なな山緑地の会/水辺の楽校/よみがえれ大栗川を楽しむ会等で活躍中



大栗川親子でガサガサ



なな山緑地自然観察会

～活動団体を訪ねて～

永山駅前緑地 さえずりの森

永山駅前緑地林保存育成の会 代表 浅井 民雄

駅前の憩いの森 “さえずりの森”

今年の4月初めに、NHK BSTV「こころ旅」で「駅前の憩いの森」として放映されました。線路を挟んで隣の大学病院に通院していた方が、さえずりの森を散策して心が癒された、という手紙が披露されました。永山駅前のバスターミナル広場のすぐ前に1万㎡の緑深い森があり、春夏は、いつもウグイスが囀っています。まさに憩いの森、さえずりの森です。

“さえずりの森”は市民の要請で開発から守られたグリーンボランティアが管理している他の緑地と異なる点は、市民の要請活動でURから市が買い取り、そのまま残すことになった緑地だということです。URによる開発計画を阻止して、署名運動等、URや多摩市に働きかけて、市に買い取ってもらいました。その市民の意思が森を守ったといえます。“さえずりの森”の愛称は、市民の参加した投票によって決まりました。

永山駅前緑地の特徴

この1万㎡の森の特徴は、2つの小さな尾根があり、3分の2はいわゆる雑木林で、コナラ、クヌギ、ヤマザクラを中心にした落葉樹の森で、林床はアズマネザサが密生しています。斜面の上部にはシラカシを主体にした常緑樹林になっています。落葉樹の林床には、春はエビネやギンラン、カタクリやシロバナイチヤクソウなどが咲き、夏にはキツネノカミ

ソリが見事に咲きます。左下の写真は、林床から日当たりのよい土手の斜面に進出した部分です。

特にこの森が貴重なのは、林床のアズマネザサの中にタマノカンアオイが、それも多数の大株が群生していることです。タマノカンアオイの大株がこれだけ残っている所は多摩丘陵でも少ないものと思われます。また、一部の湿地帯の草地には、都内ではすでに絶滅種となっているツルニンジンの亜種・バアソブが群生しています。

これだけ貴重な植物が存在していたことが判ったのは、この雑木林をみんなで保存したことで、そして下草刈りなどで手入れをした結果だと言えます。

緑地の管理作業

林の管理はできるだけ自然の状態を残して、散策路の整備、枯れ枝の撤去、笹刈り、外来種の除草、ゴミ拾いなどを行っています。散策路等の落ち葉は履き貯めて、堆肥場で堆肥にしています。枯れ枝は数カ所に置き場所をつくり、積み込んでいますが、腐蝕して土へ還るには時間が掛かりそうで、量が増えそうに対策を考える必要があります。

会が生まれた経過から会員は多いのですが、作業ができる会員が少ないのが悩みです。今後講習を受けた元気な会員が増えることを期待しています。

活動日や連絡先

活動日：毎月・第2月曜、第4水曜日

活動時間：9:30～15:00（午前だけでも可）

問い合わせ：多摩市立グリーンライブセンター

tel：042-375-8716



キツネノカミソリ群生



シロバナイチヤクソウ



タマノカンアオイ

～活動団体を訪ねて～

からきだの道の会

会長 大石 武朗

からきだの道を守り育て未来につなげたい

からきだの道とは

多摩ニュータウン開発に伴う唐木田地区のまちづくりの一環として、昔の唐木田谷戸の面影も残しつつ、新しい街並みにとけこむように復元・整備された緑地です。唐木田駅の西北に位置し、面積は約5haと東京ドーム1個強ながらゴルフ場(府中CC)に接して東西に細長く、全長1.8kmの起伏に富んだ散策路を有しています。平成9年に開園して以来、近隣住民の皆さんの憩いや健康増進等の場として親しまれていますが、最近では遠方より散策ウォーキングに訪れる方も増えつつあります。

からきだの道の見どころ

散策路は自然とふれあえるだけでなく、造成前の唐木田の生活道路も一部活用され随所に古き良き名残も感じることもでき、見どころ満載です。

春は市内の桜の名所ともなっている、斜面に植えられたシダレザクラが一面に咲く「からきだ百本シダレ」、「お花見広場」とそれに続く「尾根の径」のソメイヨシノの並木、さらに遅咲きのヤエザクラが咲き揃う「ヤエザクラの原っぱ」にて独特の風情ある景観が楽しめます。「砦山」はランドマークとなっているソメイヨシノの巨樹がそびえ、富士山を望める唯一のスポット。「草花園」へと続く「あじさい坂」は初夏、アジサイの群生が見頃となります。

緑地全般、コナラやクヌギ等の落葉樹も多く、晩秋から初冬にかけて見事な紅葉と落葉のじゅうたんが楽しめます。また、山野草の宝庫でもあり、キンラン、ギンラン、タツナミソウ、フデリンドウ、ジュウニヒトエ、タマノカンアオイ等の希少植物が自生。群落もあれば凛として一輪咲く花もあり、散策する人にひとときの癒しと憩いを与えてくれます。竹林も多く、保全育成を兼ねて実施している“タケノコ掘り体験会”は親子で楽しむことができ毎年盛り上がりを見せています。

「かぶとむしの林」はカブトムシのすみかとして復活しつつあり、夏には虫捕りも楽しめ、その近くにある緑

地内唯一の水辺「寺ノ入の湧水」では、運が良ければカルガモのおしどり夫婦に遭遇できるかもしれません。

「からきだの道の会」の活動

見どころは豊富なものの、変化に富んだ地形、とりわけ急な斜面や高低差の激しい道がこの緑地の保全を著しく難しくしています。開園して約20年の間、徐々に荒廃が目立つようになってきました。生い茂った樹木で展望ポイントでの眺望が利かなくなったり、木製階段が傷んで歩きにくかったり、枯木や倒木がそのまま放置されていたりの有りさま。そうした状況を見てもらえない、何とかしなくてはと近隣住民有志が立ち上がり、平成23年「からきだの道の会」が発足。後に「多摩グリーンボランティア森木会」に加入して活動の環を広げ、市の公園緑地課とも連携しながら雑木林の下草刈り、林床整備、希少植物の保護観察などの保全活動を続けています。会員数は15名(H28年7月1日現在)。

喫緊の課題は雑木林全体の若返りを図ること。即ち、樹齢を重ねた樹木を伐採し、萌芽を育て、次世代の樹木へと世代交代させることです。そして、雑木林の中を明るくすることで、休眠していた草花だけでなく、昆虫や野鳥、小動物などの回帰を図ります。

からきだの道の将来ビジョン

“雑木林の荒廃を何とか食い止めた”が我々の活動の原点であり、“多種多様な生物が生息する良好な自然環境を守り育て、次世代へと継承させたい”が将来に向けた目標です。将来ビジョンは、多摩市の花に選ばれている“ヤマザクラの名所にしたい”。具体的には、緑地の上層にヤマザクラ、下層にサトザクラが咲き誇り、四季を通じて楽しめるよう桜以外の色々な花木で彩るイメージです。地域コミュニティの醸成も図りながら魅力ある企画づくりを進めたいと考えています。

活動日や連絡先

活動日：原則として毎月第2日曜日午前中 集合場所：榎戸公園

問い合わせ：多摩市立グリーンライブセンター



からきだ百本シダレ



活動中



集合写真



あじさい坂

多摩市みどりのかわら版

身近なみどりへの小さな興味

多摩市環境部公園緑地課主任 岡野則夫

「めかい」をご存知でしょうか。めかいは、篠竹を使った目籠のことで、多摩地域では農閑期に盛んに作られていました。11月から2月頃に採取した篠竹を剪定ばさみ、鉋、めかい包丁、鋸等でめかいの材にして、六つ目編みで籠にします。

めかいは以前は農家の大切な収入源でしたが、戦後はプラスチックなどに押され、現在は作る人がほとんどいなくなっていました。数年前に市主催のめかい講座で関わりができたこと、その受講生から“今のうちに作れる人から学び、この伝統工芸を後世に継承しよう”という気持ちが生まれ「多摩めかいの会」というグループも誕生したことから、私も会の一員として数年前からめかいづくりを楽しんでいます。

また、最近、自宅の小さな垣根など樹木の剪定が少しは綺麗に出来るようになれば良いな～と思い、多摩グリーンボランティア講座に参加しています。この講座は「雑木林を知る」と題した全10回の講座で、樹木への関わり方、剪定の時期や方法、道具の一般的な注意事項や使い方、処理の仕方など多くを学べる講座です。この講座を最後まで受講し、自宅の垣根はもちろん、近くの緑地などの剪定、伐採、下草刈り等管理のお手伝いが出来たら良いなと思います。

余談ですが、講座で知識を深めた私は、少し風通し良くしたいと垣根の剪定を始めたところ、ブーンと大きな蜂が飛んでいるのを確認しました。離れて静かに見てい

ると、直ぐ傍に徳利をひっくり返したような形の巣がありました。夜になってから、防虫網の付いた帽子をかぶり、長袖に厚手の手袋をし、殺虫剤を掛けて駆除しました。興奮して血圧上昇、心臓ドキドキでした。後日専門家に聞いてみるとスズメバチの一種で巣つくりのはじめの段階とのこと。働き蜂が出来ると上のほうから貝殻状の巣に変わって行くとの事で、今年は暖かいので早くから活動し始めているとのことでしたよ。皆さまもお気をつけください。



オジロアシナガゾウムシ



スグリゾウムシ

編集後記

夏の雑木林は色鮮やかな草花が楽しませてくれます。そこに集まる昆虫もまた可愛らしい。最近にはゾウムシにはまりつつあるのですが、ツバキの実をグルグル回るツバキシギゾウムシやクズの葉でボテボテした様子のオジロアシナガゾウムシ、私の手をトコトコ歩くスグリゾウムシにハートをつかまれてしまったところでした。

また、別の場所に目を向けるとピンクの綿のような可愛らしい樹木が目を引きまします。ネムノキです。

ネムノキはマメ科の落葉高木で、夜になると小葉がパタッと閉じて脱力したかのように垂れ、眠っているように見えることから「眠る木」「ネムノキ」となったという説があります。

なぜ葉を閉じるのか・・・所説あるようですが、はっきりしてはいないようです。夏の雑木林にキュンキュンしているこの頃です。皆さまもお楽しみください！（高澤 愛）

表紙の絵

「ヒルガオ」(ヒルガオ科)

名前は昼間に咲くことから来ているようですが、朝から咲いています。よく似たものに「コヒルガオ」があります。

絵・内城 葉子

<プロフィール>1949年東京生まれ。

1986年国立科学博物館第2回植物画コンクール文部大臣奨励賞、1989年世界らん展ボタニカルアート部門ブルーリボン賞、英国王立園芸協会ロンドン・フラワーショーGold Medal 受賞など

<所属>日本ボタニカルアート協会、日本植物画倶楽部、どんぐり山を守る会代表

<著書>「鏡の中-俳句と植物画」共著、2005年新風舎。他、絵本や学習図鑑などに描画。

多摩市グリーンボランティア通信 グリーンサークル23号

発行日:2016年7月15日

編集・発行責任:多摩市グリーンボランティア連絡会 事務局

〒206-0033 東京都多摩市落合2-35 多摩中央公園

多摩市立グリーンライブセンター内

電話 042-375-8716 FAX 042-375-0087